

心理的距離尺度の両端：最遠域と最近域の現象学的意味

山根 一郎*

Both sides of Psychological Distance Scale: Its Phenomenological meanings of Farthest and Nearest Area

Ichiro YAMANE

1. 問題

1.1. 心理的距離モデルが自明視していたもの

他者との間に経験される心理的・存在論的間隙の構造と動態を現象学（一人称）的視点で構築した「現象学的心理的距離モデル」（山根, 1987,1995. 以下, 本モデル）は, その後, 数学的・力学的検討を経て, 距離の定量的な測定（尺度化）への道を探りはじめた（山根, 2016）。その過程で, 「能動表象」的距離（Figure 1）を試行的に計測してみた（山根, 2015）。不可視な構成概念を可視化する尺度化のためには, 概念的定義と操作的定義との対応づけが先決事項だからである。そこでは, とりあえず距離の原点の0を「自己」とし, 最遠点の14を「アカの他人」とした15段階の単純な目盛りを用い, 「最も近い人」および数回目の授業担当者である筆者についての距離感（能動表象）を回答させた。その結果, 両者への回答はいずれも両端を除いた1から13の間, すなわち自己でもアカの他人でもない域内におさまった（この調査の目的はこの結果を得ることではなく, 表象体験の内省報告にあった）。

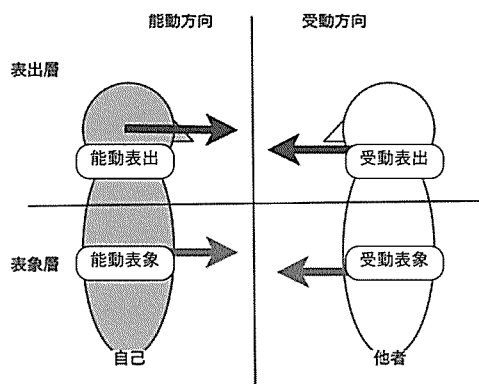


Figure 1. 心理的距離の4側面。自己が他者との間で体験する2方向2層の心理的距離。表象は内的反応, 表出は行動に含意された心理的距離。

*心理学科 教授

この例のように、心理的距離（モデル、尺度）の対象となる他者は、コミュニケーションを
しあう既知の「知人」であることが前提とされてきた。したがって上の調査で用いられた尺度
の両端は、最初から回答が想定されない外域になっている。心理的距離を尋ねたい対象はたい
てい知人であるので、実用的にはそれで支障はない。しかし、本モデルに基づく尺度は、その
目指すところが、形式的な“客観性”確保ではなく、心理的距離経験に根拠づけられた定量化
であるなら、その点で上記の尺度は不徹底といわざるをえない。

なぜなら、この尺度とその根拠となる本モデルは、ともに知人以外の自己とアカの他人をそれ
ぞれ定点として前提・自明視しているためである。そもそも尺度の両端は、それらに挟まれ
る一次元空間（有限直線）を定義するものに等しい。実際、両端の「自己」と「アカの他人」
が他者への心理的距離（たとえそれが両端に入らない知人であっても）の判断基準として呈示
されているのであるから、その両端がそれぞれ距離値（距離上の位置が定量的ではなく、定性
的レベルであるため、この表記を用いる）として意味するものをモデルにおいて説明可能でな
ければ、尺度としての要件を満たさないことになる（そうでないと、この尺度は学的根拠のな
い通俗的なものすぎなくなる）。この点が不徹底なのである。

このように、本モデルがいやしくも“現象学的”と称するなら、自らに紛れ込んでいる無根
拠な自明視を徹底的に抉り出し、それらを現象学的に再構成することで、モデルの深化を一步
一歩進めていかざるをえない。

1.2. 距離空間は等質か

この心理的距離空間の両端の問題は、測定される尺度空間内の等質性の問題につながって
いく。等質性は等間隔性（間隔尺度）を可能にするためである。すなわち、両端点の間に挟まれ
る空間の等質性は、たとえば上述した15段階の尺度の場合、0（原点）から1までの間と1
から2までの間との等間隔性、そして14（最遠点）から13までの間と13から12までの間と
の（従って0から1までの間と13から14までの間との）等間隔性が想定できるのかという問
題に置き換えられる。ところが上の尺度では、原点と最遠点は、「自己」と「アカの他人」という、
「知人」とは質的に異なる関係対象（面識性）を置いている。その異質性が、距離という量的
な差異に還元可能なら、（大抵の心理学的尺度が許容している程度の）等間隔性が想定可能か
もしれないが、距離以外の質的な差異がみられるなら（名称が異なることからその可能性がお
おいにある）、距離空間の等質性が、概念段階で保証されないことになる。

むしろ、関係が成立していないアカの他人に対する心理的距離は、関係を営んでいる知人と
同質とみなすことに無理があろう。本モデルでいえば、アカの他人は知人では成立している能
動表出・受動表象・受動表出の距離が得られない他者である。一方、原点には自己を置いて
いるが、対象としての他者が点であるから、主体としての自己もまた点であるといえるのか。自
己内に距離空間は存在しないのか。この問いは、社会心理学的視野では不要といえるが、自己
心理学や精神医学レベルでは問題化可能であり、その問題が自己自身にごく近い他者への距
離体験の尺度値に影響を与える。

当然ながら、心理的距離尺度は、心理的距離概念そのものと整合してはならない
（構成概念妥当性）。心理的距離尺度に「自己」と「アカの他人」を配置するなら、当然その根
拠となる本モデルにおいてもその両者を距離対象として考慮されてはならないのである。
となると、この距離空間の等質性の検討は、尺度構成上のテクニカルな問題というより、
心理的距離空間全体を知人領域の延長とみなせるか否かという、本モデルのさらなる精緻化の

要請であり、根拠なく点と自明視された心理的距離空間の両端部に対して、さらなる理論的な考察が要請されるものである。

1.3. 本稿の目的

以上の問題から、本稿は、心理的距離尺度の両端に配置されながらも、自明視され問われてこなかった自己とアカの他人の双方の距離空間上の位置を、それぞれ現象学的心理的距離モデルにおいて明確にすることを目的とする。まずは知人とともに距離対象側に配置されるアカの他人の領域すなわち「最遠域」を論じ、次に原点となる自己領域を含む「最近域」を論じる。そしてその成果をもとに、それら両端によって開かれる心理的距離空間を再確認してみる。

2. 最遠域

心理的距離が及ぶ最遠域について、固有の2つの問題が考えられる。ひとつは、対人関係の心理的距離において、最も遠い距離（最遠点）は無限遠かということ。そして知人に対して取り得る有限遠としての最遠点はどのような距離かということである。この2つは、最遠域の距離としての価（量）とその質を問うものである。

2.1. アカの他人への心理的距離

そもそも見ず知らずの他者に対して、心理的距離が存在する（体験可能な）のであろうか。自己にとって心理的対象として存在していない、すなわち能動表象できない他者は、志向対象（ノエマ）化できないのであるから、計測不能なのではないか。

では計測不能は無限遠に等しいのか。この問題をまずは本モデルを数学的に捉えた形式論（山根，2016）の立場で議論してみる。無限遠は、あらゆる有限な距離よりは遠いという相対的性質は確保される。一方、計測不能は価が「不定」であるため、上のような性質すら確保されず、あらゆる他者より近い潜在性も否定されない。本モデルによると、心理的距離が遠くなること

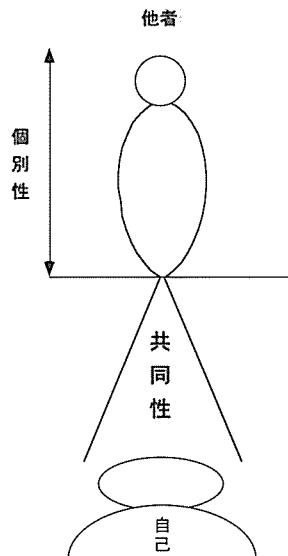


Figure 2. 個別性と共同性。心理的距離の2要素を空間的距離感に対応させると、「個別性」は相手の見えの大きさ、「共同性」は相手の立ち位置までの隙間に相当する。

は、その逆数概念である「共同性」(Figure 2) すなわち相手に対する親密感が0に近づくことを意味する。そして距離対象を志向できないということは、その共同性を可能にする他者の個体識別を含む「個別性」がそもそも0であるということをも意味する(そうでない可能性があることは後述する)。

心理的距離は共同性の逆数であることから、共同性が0である場合、分母が0となるため距離の値は算出不能、すなわち「不定」になる。不定であるなら、上述したように距離評定の基準としての最遠点に固定されない。しかし、実際には心理的距離が遠い知人もアカの他人よりは近い距離値で評定されていたことから(山根, 2015)、これを逆に見れば、アカの他人に対しては知人以上の“遠さ”が評定されることであるから、経験的にはその値を「不定」とすることはできない。そこで、共同性が確保されないにもかかわらず、距離の遠さは確保されるのなら、共同性は0という値ではなく、限りなく0という極限值とみなせば、距離値はその極限値の逆数として無限とみなせる。

以上が形式的議論である。では改めて問う。アカの他人への共同性の極限值は、経験的にも0なのか。「アカの他人」として呈示された、氏素性の不明な行きずりの他者に対して、親密性はまったく感じられないのであろうか(この議論は2.2 c)に続く)。

2.2. 面識性としての真他人

このようなアカの他人に対する心理的距離経験を考える場合、本モデルとともに対人関係を記述する概念装置である「面識性」や「間柄」などの他者関係の定性的モデル(Figure 3)との関係が重要になる(山根, 1987,1995)。面識性とは、他者を先ず面識の有無によって「知人」と「他人」に分け、さらに心理的距離の遠近によって知人を「真知人」と「周辺知人」、他人を「真他人」と「知他人」の計4種に分ける基準である。心理的距離空間の全領域を面識性の4種で特徴づけるのは大ざっぱすぎるが(山根, 2016)、「他人」の領域である最遠域にしばって議論

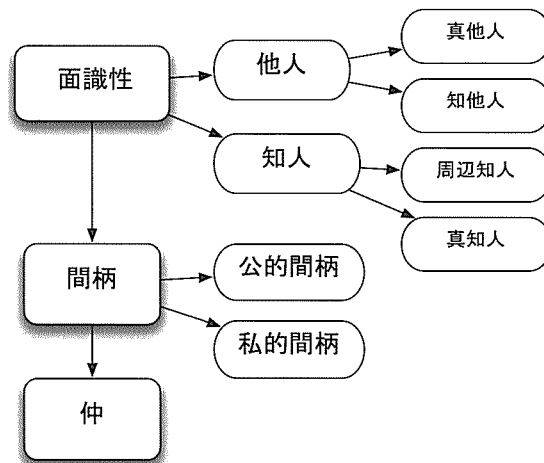


Figure.3 他者関係の3水準。山根(1995)にもとづく、他者との関係性の定性的モデル。まず面識の有無で「知人」と「他人」に分れ、それぞれがさらに2分する。「知人」である場合、「間柄」が確定され、さらに同じ「間柄」でも「仲」の程度の差が発生する。「仲」の進展は「私的間柄」を発生させる。

するには、面識性での議論が役立つと思われる。

距離の最遠域となる他者は、面識性の真他人が該当する。真他人とは、互いに匿名な状態の他者で、個人としての情報がなく、また相互的やりとりがないため、個別性・共同性ともに特定の値がとれない。すなわち、知人的な心理的距離空間が開かれない他者である。個人としての特定ができないため、非対面での表象ができず、また受動距離を得ていない。このように心理的距離の4側面が成立しないため、ズレやミゾの体験はない。その他者が同種他個体という存在者的他者要件を満たしていても、自己に関心を向けてくるという存在論的他者（山根, 2004）になっていない状態である。

a) 真他人への距離体験：志向距離

では、ある場面で視野に入っている真他人は、距離の表出を伴う関係は開かれていないとしても、認知的にも無意味な対象であろうか。公共空間で遭遇する真他人に対して、他者（同種他個体）という存在者であることは認知されている。他者その人であることの何がしかの外見的特徴は、それなりの個人的情報（個別性）として受け取られる。その認知（個別性）レベルでの真他人固有の距離体験は、すでに「志向距離」（山根, 1998）として論じられている。

志向距離とは、視野の一部を占める真他人に対して感じる、志向的反応としての個別性（存在感の強度）の逆数を意味する（この点が共同性の逆数としての心理的距離と異なる）。他者の知覚体験にもとづくその場での反動的な志向体験であり、表出行動は伴わず、知人的な心理的距離のように内面化されるものではない。志向距離の体験は、まずは自己側がその真他人を視野に入れ、存在を認知している状態から始まる。その場合、相手（真他人）との空間的距離が近いほど、そして互いの顔の向きが正対に近いほど、存在感が強くなる（志向距離が近い）。すなわち空間的距離と顔面の鉛直軸上の向きが志向距離を規定している。その他の要因として、相手の顕在性（知覚的に目立つ度合い）がある。この顕在性は、生態学的価値をもった場合に効果が一層強まる。すなわち、脅威あるいは性的誘引となる場合などに志向距離は近くなる。

志向距離は、心理的距離のような関係（コミュニケーション）を通しての距離感でなく、非関係的な志向的構成のみによって成立する距離感である。志向距離は眼前での知覚体験に依存するため、非眼前での表象は、よほど記憶に残らない限り発生しない。そのため、志向距離では知人に対してのような共同性は開かれない。むしろ真他人に対する共同性は、志向距離とは別個の以下の（知人を前提とした）心理的距離にかかわる諸力によって喚起される可能性がある。

b) 真他人に作用する心理的力

では、真他人に対して心理的距離を変化させる心理的な力（山根, 2016）はいかに作用するか。個別にみていく。

間柄力：真他人は、心理的距離の遠さという量的特徴の他に、間柄（関係の社会的カテゴリー）の欠如という質的特徴を備えている。すなわち特定の間柄を構成していない状態であり、実際「アカの他人」という言葉には間柄的なかかわりが存在しないことが含意されている。間柄は初対面の他人を知人化できる社会的根拠であるため、その欠如は心理的距離を接近させる可能性を抑制する。いわば間柄力は真他人との心理的距離においては負の力として作用する。

均衡力：間柄の欠如は、相手からの無関心という受動表出の無さで体験される。そして、その他者に対して自己側も無関心以外の表出行動をしづらい。そうして無関心という均衡が成立するのである。この均衡によって無を有化する（関心を示す）ことへの抵抗が発生する。

魅力：真他人であっても存在者的個別性、すなわち他者としての外見的情報量は確固と存在し、それらは魅力という心理的距離に及ぼす力を発揮させる。異性の示す美的魅力が、たとえ

真知人であっても心理的距離を接近させる力（動因）として作用するように。また同じ対象の愛好者であることを示すファッションなど、自分と共通した属性を示す他者に対しては共同性が開かれ、それが接近させる力になる。このように、間柄のない真他人にも心理的距離を接近させる力は存在する。

共在力：空間を共にすることは、状況の共通性を相互に了解させる。すなわち共通の生活状況にいたるため、互いに情報交換、共感、協力を求めやすい。山小屋や避難所での共在場面がその典型である。そこでは空間的距離の近接と共在時間が持続して状況の共通性を高め、上述した志向距離にこの共在力が加われば、真他人同士であってもたやすく共同性が開かれてくる。その共在が今後も持続することが互いに了解されていれば、知人としての関係・間柄がさらに成立しやすくなる。「隣人」という間柄は、このような空間の永続的隣接だけで成立する。ただし、居住地の隣人と異なり、山小屋などの一時的な共在の場合、その山の中でのみの知人化という限定性があり、持続的な知人には至らないのが通常である。

c) 原共同性

真他人とコミュニケーションをとりにくい原因に、真他人が蝟集する都市特有の「儀礼的無関心」の規範がある（Goffman, 1963 丸木・本名訳 1980）。都市空間では互いの真他人は無関心を示すことがマナーなのである。これはいいかえると、空間の人口密度が下るほど、真他人同士でも自然な関心を示すことが可能となることを意味する。むしろ人跡が乏しい自然環境の中では、遭遇した真他人（同種他個体）に対して無関心でいる方が困難であり、関心を示すのがマナーですらあろう。そのような状況では、相手が自分と同じ人間だという認識だけで喚起される親密感を想定できる。この同種他個体に対する前経験的な共同性は、社会性のある生物種に備わった性向、すなわち前心理学的な生得的反応機構といえ、経験的な共同性を可能にする“原共同性”とみなせる。上述した最小限の個性性にもとづく最小限の共同性が、同種他個体という最小限の個性性にもとづく原共同性を指すなら、その価は関心を示す（能動表出）力をもっているため、極限值0ではなく、それよりは明らかに大きいのではないか（ $\neq 0$ ）。

とするなら、眼前する真他人に対しても（都市空間内であっても）、前経験的に原共同性は極限值0よりは大きく開かれていることになり、その逆数である心理的距離も無限遠ではなくなる。ただし特定の知人のような距離の確定性はなく、また同じ真他人でも魅力などの個人差があるため、知人より遠方域に限定された不定価といえる。

真他人に対して原共同性が想定されるなら、より無限遠側の真の最遠点は、この原共同性すらない他者が相当する。それは魅力も共在力ももたず、同種他個体であるが個人として現われない、たとえば都会の雑踏を構成する風景の1要素、満員電車内でのしかかってくる圧力源でしかない質量としての個体、すなわちモノとしての「他」（外的存在者）に相当する。1対1の関係が開かれる可能性のないそのような個体は、対人関係としての心理的距離の基準にすらならない、真の最遠点といえる。

d) 真他人の距離価

以上から、眼前する真他人への心理的距離の最遠点は無限遠ではなく、原共同性に対応する価をもっていると想定する。さらにその真他人の個別的な魅力や醸成された共在力によって、より近い距離に向かうことも可能である。すなわち真他人という面識性内においても、遠近の幅が存在しうる。ただしその幅は知人域内の幅の広さとは比較できないほど限定されたものであろう。その理由は、真他人に対して個性性や共同性が確固として開かれた場合、真他人は面識性が質的に異なる他者になるためである。「知他人」である。

2.3. 知他人化

最初は互いに匿名の真他人であっても、魅力や共在力によって、再認される他者、すなわち同一個人として特定できる状態になった場合、それは面識性が変化し、もはや真他人ではなく知他人になる。知他人になれば、相手の個人情報に能動的に得たり、一方的な感情を抱くことも可能となる。非眼前状態でも相手を想起できるので、能動表象における距離が開かれる。ただし、受動距離が得られていないため、能動距離を知人並には表出できない。真他人と同じく特定の間柄が無いためである。

知他人に作用する距離の力としては、真知人と同様に間柄力は負に作用し、正の方向に作用するのは魅力と共在力である。真他人と異なるのは新たに表象力が加わる点で、この点は知人に近い。

すなわち、知他人は、個別性と共同性がともに開かれているが、情報量の増えない遭遇（単純接触効果）、あるいは非眼前での能動表象の繰り返しによって個別性<共同性という状態になる。その結果、能動表象は他の3側面に対して距離が近くなっているため、ズレ・ミゾ・不整合が発生している。ただし知人関係のような距離の近さがなく、ジレンマとして感じるほどの強度には達しない（一方的な片思いの場合は別だが）。言い換えると、能動表象のみを測定すれば真他人よりは近い距離におかれる他者となる。負の力に抗してミゾを解消する行動に出れば、知人化を実現できるかもしれない。

2.4. 知人化

それまで他人であった他者が知人化（面識性の転換）するのはどのような契機か。能動表象だけは知他人段階でも開かれるため、そして知他人では知人になれないため、きっかけとなるのは表出にかかっている。すなわち知人化は行動によって実現する。それは他人に対して抑制されていた行動の解放を意味する。知人化にまず必要な最低限の行動は正視と発話である（相互の実現としては視線交錯と会話）。ただし他人レベルでなされる接客行動などの違いが存在する。その違いは知人であることを示す社会的有標性を意味するが、具体的な有標行動は間柄に依存するため、結局知人化は間柄化によって達成されることになる。言い換えれば、間柄力が存在すれば、初対面（実質的に真他人）でもその間柄にふさわしい有標行動を示すことができ、むしろ要請さえされる。間柄力は、魅力や表象力と異なり、社会的共通認識として相互に等しく作用するため、その相互性にたよって躊躇なく行動化できる（この点、魅力は非対称的に作用するため、魅力に乏しい側は行動化に勇気が必要となる）。逆に間柄力が作用しないと、その場限りの知人化に終わり、関係として持続しない。

すなわち、知人化は間柄に依存しており、知人化によって発動する心理的距離の変化は間柄の成立に後続する。ということは、知人化直後のように間柄の認識では知人であるものの、共同性の醸成が不十分で心理的距離はまだ遠いという状態がありうる。その状態の他者が「周辺知人」である。

2.5. 周辺知人という不確かな状態

上記の状態の周辺知人は、相互に面識のある知人、すなわち4側面の心理的距離が開かれている他者としての遠域を構成する（近域が真知人）。それは能動表象に限っては知他人を越えて、真他人に次ぐ遠方距離にある他者となる。真他人と異なり、知人としての共同性はそれなりに存在することから、特定の遠さ（有限遠）をもっている。したがって本章冒頭で挙げた2つ目

の問題は、真他人の距離と周辺知人の距離の違いに相当する。

周辺知人は、知他人とは逆に能動表象では遠い存在であり、個性性>共同性という状態である。ただし間柄力は作用しているため、有標行動を表出する規範的圧力がかかる（儀礼的関心）。共在力・表象力も乏しいことから、上述の規範的圧力が負荷となり、共在することが苦痛ですらある。以上から、周辺知人に対しては、間柄力だけが強いいため、能動表象より近い能動表出が要請されるズレにさらされる。

2.6. 最遠域における面識性

以上の考察から、最遠域は次のようにまとめることができる。面識性としては真他人が最遠域に位置するが、眼前する真他人においては、その価は無限遠ではなく、原共同性という他者一般に対する最小ながら一定の共同性（心理的距離の逆数）の価をもつ。その価が心理的距離ではどう表現されるかは、真他人と遭遇する状況・環境によって異なる。原共同性の価を確認するには、原共同性が顕在化された状況と潜在化された状況との比較が必要となる。

また、真他人でも志向距離に魅力や共在力（個性性 + 共同性）が伴えば、心理的距離が最遠点より近くなるのが可能となる。ということは真他人にも遠・近の区分けが可能かもしれない（その差は単純接触効果の研究などで表現されている）。

では、有意味な他者である知人の最遠域である周辺知人は、真他人が位置する最遠点とどのように異なるのか。真他人との質的差異は、周辺知人には距離の4側面が開かれている点である。周辺知人の能動表象の価は個性性や過去の関係に基づく共同性に依っている一方、真他人の共同性は非個別的な原共同性でしかない。この共同性の違いが周辺知人との心理的距離の量的差異に反映されよう。すなわち周辺知人との共同性は原共同性より大であることが定義上の条件となっているため、尺度上も真他人より近い距離になるであろう。

以上から、心理的距離尺度の最遠点（仮に14とする）は、無限遠ではなく、相対的に最も遠い価（原共同性に相当）としての真他人、すなわちあらゆる知人よりは遠い点に相当し、知人で最も遠い周辺知人がそれより1目盛り分近く（たとえば13）に該当することになる。そうすることで周辺知人（13）以下は知人域の量的変動とみなすことができる。そして知他人は真他人より近く、能動表象に限れば周辺知人よりも近くなりうる（Figure 4）。もっとも上述した論議から真他人を遠・近に二分して、たとえば14と13に配分することも可能であるが、そうすると14と13の差と13と12（周辺知人）の差が異質になってしまう。尺度の両端があ

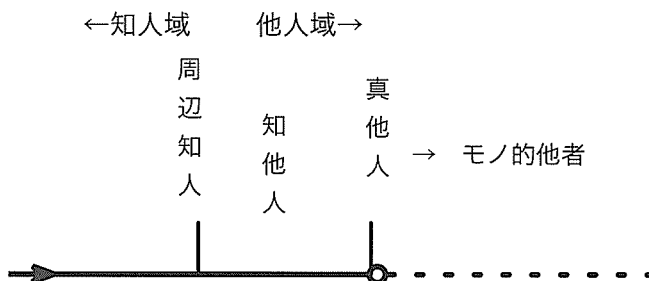


Figure 4. 真他人近傍の距離空間。尺度として価が取れる知人域の最遠域が周辺知人域である。他人域に入ると、近い順に知他人、真他人となり、特に真他人は周辺知人より遠いという限定つきで「不定」となる。そして原共同性すらない真他人は無限遠となる。

る程度特異性をもつことは容認されようが、尺度内で特異な差が発生するのは好ましくない。このように仮説的ながら、最遠域は確定された。

3. 最近域

心理的距離尺度における自己側の端域を、最遠域に対応する意味で「最近域」とする。最近域の端である自己を原点の0とするなら、心理的距離尺度は比率尺度となる（当然ながら等間隔性も満たす）。そして原点から1までは「単位距離」という有意味（基準）性を必要とすることになる。尺度としてのこれらの形式的要件は、心理的距離空間の現象学的性質を満たすであろうか（本来の問いは、現象学的妥当性を満たす厳密な心理的距離尺度が可能であろうか）。最近域を特徴づけるにおいても2つの問題を考える。1つは、原点である自己は点にすぎないか、それとも空間であるか。いま1つは、他者はどこまで接近可能かである。これらの2つの問題は、自己と他者の心理的境界の問題に帰結する。

まず、原点は自己を示すとしたが、心的空間上の自己は原点という幅のない点に限定されるのであろうか。社会心理学的視野においては、自己を自他関係を構成する線分の一方の端点（要素）とみなすことに支障はない。ところが自己心理学的なより微視的な視野に拡大すると、点が面に、自己を構成している心的空間が問題になりそうである。そういえる根拠は、他者との心理的距離そのものが自己の心的空間内での体験といえるからである。この問題についてはすでに前掲論文（山根，2012）で「心的空間が自己と世界を包摂し、世界に開かれた空間だけではなく、むしろ本質は自己の内的空間であるなら、自己は空間であって1つの点ではない」と論じている。

自己が点ではなく空間であるなら、その空間を構成する原点0と他者との境界点が空間的に分離されることになる。これらについても前掲論文で、自己の空間内の原点は「あらゆる認識の照射源たる主我」であり、安永（1992a）の表現を借りれば「極自我」あるいは「現象学的自極」であるとし、そして自己空間の境界、すなわち他との境界は「自我境界」とした。それら2つの空間要素を今一度取り上げることになる。

3.1. 自我境界

自我境界(ego-boundaries)という概念が最初に登場したのは、小此木(1998)の概観によれば、Tauskの1919年の著作であるという。Tauskは自我境界を自我意識の境界とみなした。その後、この概念を整理したのはFedern(1953)であり、彼は自我境界を外的自我境界と内的自我境界に分けた。本稿での自我境界は外的自我境界に対応する。Federnの自我境界は、境界の透過性、すなわち境界の脆弱性が問題とされており、少なくとも外的自我境界に関する限り、自我の空間性は前提されていない。Landis(1970,馬場・小出訳1981)は自我境界モデルとして、Federn的モデルのほかに、内部空間を想定しているLewinのトポロジカルモデルを紹介している。だがトポロジーは距離を無視する空間論であり、またLandis自身、Federn的な境界の透過性(脆弱性)に関心が向いている(ちなみにLandisは「自己境界」(self-boundaries)という表現が本来は正しいと主張している。筆者も同意見であるが、やはり氏同様、既に定着した「自我境界」を使うことにする)。

このように既存の自我境界論は、自己の内的空間の問題としては論じられてはいない。そのような空間的境界に相当するのは、むしろ安永(1992a)の「ファントム定常距離」あるいは「自我図式」である。安永によれば、内閉性気質(安永では「分裂気質」)の者は、この定常距

離が長い場合、自我が他者領域まで延長され、他者を身近に置くことができないという。

3.2. 自我境界の内と外

それに対して本稿の視点は、心的原点と自我境界までの空間、そして自我境界から他者までの空間が問題となる。

a) 自己の空間性

社会心理学的視点では点とされた自己、すなわち自己を構成する空間は、主我（認識・行動主体としての自我）と客我（対象化された自我）が開く空間といえる。たとえば自己自身に対する違和感がある場合、違和感を感じている主我と違和感の対象となっている客我との間の差異すなわち距離が発生する。このように自己内の対象化される領域が自己空間を開いていることになる。さらに原点を構成する主我領域において、外界に対する知覚・行動主体である「極自我」(機能的自我)と体験的主我といえる「現象学的自極」(純粹主観, 超越論的自我, 以後「自極」と記す)は通常はおおむね一体(距離0)であるが、病的に乖離(解離)する場合を安永(1992b)は記述している。たとえば自極が極自我の前方(他側)に離れる「のめり体験」では、自極にとっては極自我が背方(心理的距離空間の負側)化するため、自己を背後から操作する不気味な存在が感じられる(させられ体験)。また健常者にも非日常的ながら、両者の乖離(≠解離)、たとえば事故に直面するときの自極の逃避的乖離のような自極が極自我(外界と主体的に対応している自己)の後方に退く現象を指摘した(山根, 2000)。

原点近傍においては安永のファントムモデルを取り入れた本モデルにおいては、このように自己は他(外界)と自我境界で接するだけの内実のない点ではなく、自極(距離の絶対原点)と主我、客我で構成される空間性をもつとみなす。そしてその自己空間の終点、外界との接点領域が自我境界ということになる。とすると自極(0点)から自我境界までの心理的距離(自我距離)が、その外に住まう他者との心理的距離の基準になるといえる。その自我距離こそ心理的距離における単位距離すなわち、距離1とみなせることは既述してある(山根, 2012)。そして外界に属する他者の接近限界は定義的には自我境界となるため、他者の接近限界は距離1ということになる。距離1近辺の他者との心理的距離については、前掲論文によると、自我境界近傍の他者は、客我と近いことから、自他が融合した「同一化」状態とみなせる。他者が自我境界を突破して自己内に侵入した尋常でない状態には「憑依」が該当する。

単位距離としての自我距離は、このように距離の基準として現象学的・心理学的に意味がある。自我距離は自己にとって絶対的な単位距離であるが、自我距離を安永の定常距離に置き換えれば個人(気質)差が存在することになるため、個人間においては相対的である(個人間の自我距離を比較できる客観的単位距離というものを想定できるかは今のところ定かでない)。微視的視野でみる心理的距離空間の最近域は、自我境界を境に内空間と外空間に分れる。

b) 内空間

内空間(自我空間)は自極から自我境界までの心的空間である。内空間は、自己内の空間として、自極・主我と客我(安永の「アイデンティティ自我」)の間で開かれる空間である。客我は他者化された自己であることから、自我境界に近い(やや内側の)位置にあるとみなせる。また、自己に同一化された他者は、他者でありながら自己へ取り入れることであるから、これも自我境界に近い(やや外側の)距離に位置するとみなせる。ちなみに演劇における演技という行為は、自己を役柄の人物に意識的に同一化し、また客我(アイデンティティ)を役柄に一致させる、すなわち自極・主我を保持したまま他者に“なる”ことである。自我空間の周縁部

で他者になりながらも、本来の自己（自極・主我）を保持している点で憑依とは異なる。

c) 外空間

外空間は自我境界より外側の他者と出会う空間（広義には心理的距離空間そのもの）である。外空間の最も近い域は、距離1の自我境界であるが（境界は内と外の両義性をもつ）、そこは他者の接近限界（可能性）域であって、同一化していない通常の対人関係の対象である真知人の位置ではない。

距離1より外側として、理念的という意味で整数倍の距離を考察してみると、距離2は自我境界を越えて相手の自我（他極）までの距離になる。その距離の他者は、自己化されない、他者性を保持しているという点で現実的に最も近い他者の位置である。その場合の自他は自我境界で接しており、「一体感」の状態である。一体感は自他の融合（同一化）ではなく、それよりは距離が遠い自他の密着を意味する。この距離は真知人の関係として可能であり、また理想であるかもしれないが、理想という意味でやはり日常的状态ではない。次の距離3になると、自他の両極の間に自我境界分のバッファ（間隙）が出現する。この距離において自他の間隙性（相異なる存在であること）が実感できる。それゆえ関係の客観視が可能となり、受動表象の推定ができるよう（必要）になる。日常的な自他関係として最も距離が近い状態はこの距離3といえる（Figure 5）。そして距離4以上はそのバッファの間隙が拡がっていく量的変化とみなせ、その量的拡大が真知人の遠域を経由して周辺知人にまで達する。

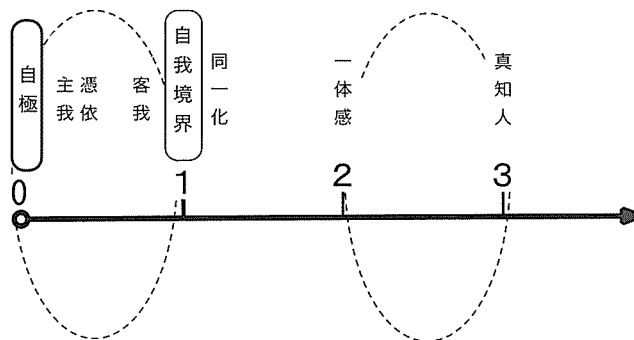


Figure5. 自我境界近傍の距離空間。自極（原点）から自我境界までが自己の内空間であり、他者は「憑依」のような状態でない内空間に入れない。自我境界が実質的な接近限界（同一化）であるため単位距離1とみなせる。距離2は互いの自我境界で接する密着した状態。距離3になって初めて最低限の間隙性が確保された通常の他者の距離となる。点線で囲まれた楕円は、自己と他者の自我空間の幅を示す。

4. 心理的距離空間

以上のように、両端域のそれぞれを詳細に考察することで、新たな概念・視点を導くことができた。

4.1. 空間の意味

たとえば遠方域では、真他人に対して非経験的に備わる共同性としての「原共同性」という概念を提出することで、真他人への距離は一定範囲の遠さであり、決して無限遠ではないこと

を示した。最近域では、すでに提出していた単位距離（自我距離）とその内空間に加えて、単位距離に近い外空間について、現象学的・心理学的根拠と尺度の定量化との融合が試みられた。たとえば、通常の他者は、ある程度固定した自我境界と変化するバッファ空間を隔てて体験されることが定量的に表現できる方向が開かれた。

そしてその両端域によって開かれる心理的距離という他者経験空間の意味がより明確になった。すなわち、心理的距離とは自己と他者の同一化から分立を経て他者のモノ化に至る空間である。「他者であること」の両義性（他なる自己）によって開かれている空間ともいえる。このように心理的距離空間は、「自己」と「他者」という対概念を定義する組上にさえなりうる。心理的距離空間が、自己と他者というわれわれの根源的な存在様式の差異を定量的に表現できるためである。

4.2. 空間の等質性の問題

心理的距離尺度は、自明視されていたその両端域を現象学的・心理学的に詳細化することで、以下のように他者経験の全幅をカバーする事が可能となった（Figure 4.5）。

0 原点（現象学的自極）→主我→客我→1 自我境界→2（一体感）→3 真知人…→周辺知人→知他人→真他人→∞モノとしての他者

ただし、新たに発掘された問題もある。心理的距離（空間、尺度）は全域を通して等質であるのか、という問題である。本稿でみてきたように、この一次元空間は、遠方域・近接域においてそれぞれ固有の距離要素が存在する。遠方域では前経験的原共同性と経験的共同性の発生が要素として重要になる。最近域の内空間は自極から自我境界まで諸要素がある。そして外空間から知人の中間域においては、距離3で発生した間隙性が等質性を確保する体験要素として記述される必要がある。すなわち、本稿の考察外であり、前もって等質性が想定されていた中間の知人域（距離3から周辺知人まで）において、距離3によって開かれた間隙性が、現象学的・心理学的にどのように心理的距離の変化に結びつくのか、それが真知人と周辺知人との面識性の差異にどのように関連するのか、という問題が浮かび上がってきた。また、それに関連して、最近域で数値化した距離値が、周辺知人さらには真他人に至るまで、延長可能であるか（尺度の有意味化）も問われる。この問いの探求によって、自己でもモノでもない存在者すなわち“他者”であることの固有性（他者の存在論）が、知人の中間域を考察することによって、示されるであろう。

このようにあえて定量的な尺度化を試みることによって、「現象学的心理的距離」モデルにより精細な視点が要求され、それによってそれまで通俗的視点によって自明視されてきた問題が浮かび上がってきた。この新たな視点によって、心理的距離という現象（体験）の現象学的探求がいつそう深まることが期待される。

引用文献

- Federn, P. (1953). *Ego Psychology and the Psychoses*. Imago Publishing.
- Goffman, E. (1963). *Behavior in public places: notes on the social organization of gatherings*. The Free Press of Glencoe. (ゴッフマン, E. (1980). 集まりの構造—新しい日常行動論を求めて— 丸木 恵祐・本名 信行 (訳) 誠信書房)
- Landis, B. (1970). *Ego boundaries*. International Universities Press. (ランディス, B. 馬場 禮子・小出 れい子 (訳) (1981). 自我境界 岩崎学術出版社)

心理的距離尺度の両端：最遠域と最近域の現象学的意味

- 小此木 啓吾 (1998). 現代の精神分析 日本評論社
- 安永 浩 (1992a). ファントム空間論, 安永浩著作集:Vol. 1. 金剛出版
- 安永 浩 (1992b). ファントム空間論の発展, 安永浩著作集:Vol.2. 金剛出版
- 山根 一郎 (1987). 心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析 心理学研究 57(6), 329 - 334.
- 山根 一郎 (1995). 対人心理的距離のモデル化 椋山女学園大学研究論集社会科学篇, 26, 1-13.
- 山根 一郎 (1998). 対人心理的距離体験における空間性 椋山女学園大学研究論集社会科学篇 v29, 109-120.
- 山根 一郎 (2000). 健常者によるファントム空間の体験例—安永理論の社会心理学的受容の試み— 椋山女学園大学研究論集社会科学篇, 31,173-186.
- 山根 一郎 (2004). ロボットは他者になれるか—テクノロジーの存在論的研究へ向けて— 椋山女学園大学文化情報学部紀要, 3,29-52.
- 山根 一郎 (2012). 心理的距離はどのような距離か 椋山女学園大学人間関係学研究, 10, 55-65.
- 山根 一郎 (2015). 心理的距離における能動表象—その現象学的接近— 椋山女学園大学研究論集人文科学篇, 46, 87-100.
- 山根 一郎 (2016). 心理的距離の照合モデル 椋山女学園大学人間関係学研究, 14, 1-12.